

日仏プロジェクト

Qui -KOTO 木-コト



日本語でKi は木でもあるし気エネルギーでもある。
フランス語で Qui は誰？。存在を問いかける。
日本語で Koto は物事を問いかける。そして箏，琴でもある。

« 誰？どんな？何をする？ »

箏を耳で聴き，目で診て、身体で感じる

【コト】は日本の原始楽器の1つで、古事記や日本書紀にも登場し、太古よりこの世と他の世界の橋渡しをする存在として、大事にされてきました。

このプロジェクトは、日本に縄文～古墳時代から存在する【コト】の歴史、人との交わり、神聖な世界との連帯を尊重しながら、どう21世紀を生きる私達と交わり、膨大な時間を共有、何を知らしめてくれるのかという事にアプローチし、箏をより細分化、多面的な見知、様々な可能性を引き出し、今まで見たことのない表現をたくさん場面構成の中で展開、進行していきます。

そこには3人、日本とフランス間で活躍している古典～現代音楽箏奏者の[日原史絵]、フランス・パリに20年在住し、ダンサー活動を続ける[鈴木香里]、身体を使った独自のマリオネットを展開しているフランス人マリオネットィスト[セバスチャン・ヴィヨ]がそれぞれの特技を出し合い、お互いをより高め合い、それぞれの背景は違っても、目指す高みを共通としながら進行していきます。

3人の手にかかり息を吹き込まれると、箏は時に神秘的で、ユーモラスで、官能的でもあります。この作品では、箏に使われる道具、誰もが気にしないでいた影にいた大事な存在にもスポットライトを当てています。

箏は自然の中に生きる一本の木であります。その中から選抜され切り倒された1本が、人の手によって新たな命を箏として歩み、音で人々に多くの事を語り、人間の未知の世界、自然と一体化する瞬間へと私達を導いてくれます。

また日本文化とフランス文化という、2つの重要な西と東の文化の融合、交流を通して、伝統と現代のアートとの対話、問題提起も行った作品となっています。

日本文化は、伝統、歴史、風習が伝統芸能のなかに強く継続されていますが、現代社会の中での存在意味が薄れてきています。フランス文化は、歴史を保守しながら新しい文化を吸収して独自の新たな文化を作り上げていますが、芯になる大事な部分が見えなくなっています。

このプロジェクトでは、箏の持っている古風な美しい存在に、フレンチエスプリの独創的な世界を取り入れて、古くから存在していながら、現代に新しいものとして受け入れられ、様々な人が、様々な見方で、想像を広げられるような世界を繰り広げていきます。



このプロジェクトの始まりは、演奏者と人形遣いと踊り手は同じ立場であるというところからでありました。

[演奏者] が心を震わせ、糸を触り音を出さなければ素晴らしい音色を出すことも、心揺さぶる旋律も放つことも出来ません。

もし[踊り手] が身体の中で何かを感じ、空間、エネルギーと一体になることが出来なければ日常の身体から抜け出すことは出来ず、ダンスは生まれません。

[人形遣い] は、心をこめて物をどのように動かすかにより、物に息を吹き込み、生命を与え、生かすことが可能になり、死までも迎えさせることも出来ます。

他の存在がいるからこそ伝える事、知る事、分かり合える事が出来ます。生きていくためには自分以外の支えが必要です。他と己の違いを理解し、他の存在を受け入れ絆を作り始める時、個人を超えた大きな存在になれます。そして両側が尊重し、共有することで始めてエネルギーが廻り始めます。



@Jean-michel Jarillot



箏の音色は、私達を未知な世界へ導くのと同時に、それぞれが想像する明白な世界へ導いてくれます。長い歴史に培われたこのシンプルな作りの楽器の、尽きない清楚で寛大なる可能性を、現代に大きな衝撃として紹介できる事を確信しています。

「見ること、聴くこと、感じること…
想像の世界に触れると 希望を膨らませ、不可能なことは何もないことを知る…」

日原史絵、セバスチャン・ヴィヨ、鈴木香里

